

主体的・対話的に学ぶ生徒の育成
～「協同的な学び」の視点による社会科の授業改善～

塩竈市立玉川中学校 教諭 島山 貴之

1 主題設定の理由

1. 1 今日的な教育の課題

宮城県の教員として、全国学力・学習状況調査の結果が全国平均を下回っている現状を改善したいという思いが強い。そのため自身ができることは、本校を含め塩竈市が取り組んでいる、しおがま「学びの共同体」の理念を取り入れた授業改善だと考える。

多くの生徒にとって、勉強とは文字通り「勉強強い」ものになっていないだろうか。周りの大人から「やりなさい」と言われて学ばされるよりも、「もっと知りたい、やってみたい」と生徒が主体的に学びに向かうことができれば、学力向上につながっていくのではないか。そのために「学びの共同体」の理念から、教師からの一方的な教授を控えること、生徒同士の学び合う関係をつくること、生徒が解いてみたいと思える課題を提示することを念頭に置き、社会科の授業改善を図っていきたい。

1. 2 生徒の実態

今回の研究対象の1年生は、指示された学習課題には真面目に取り組むことができる。しかし、学力においては上位層と下位層の二極化が進んでいる。

1学期に行ったアンケート（図1）では、「社会科の学習が好き」「やや好き」と答えた生徒の割合は約52%だった。このアンケートから、「社会科は語句を暗記しなければならない」と思っている生徒

が数多くいることが分かった。これが学習へのモチベーションを下げている一因であると考えられる。

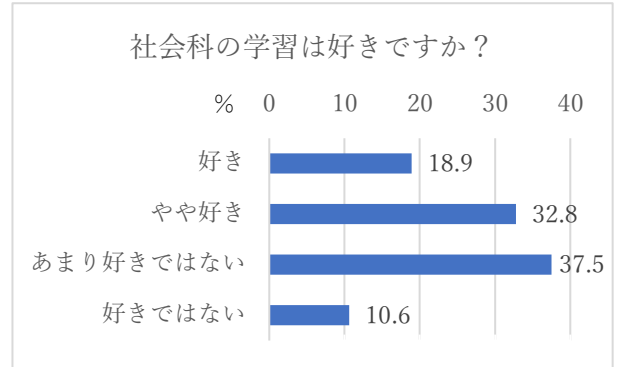


図1. 社会科アンケート（4月）

また、主に2つの小学校から入学しており、上級生に比べて学級での人間関係がまだ希薄であることから、少人数グループの活動に戸惑う姿が見られる。

2 研究の目標

学び合い、深め合う学習活動を取り入れた授業づくりを通して、主体的・対話的に学ぶ生徒を育成するための授業のあり方を明らかにする。

3 研究仮説

学びに向かう意欲を高め、学び合い、深め合う学習活動を取り入れた授業づくりを通して、以下の手立てを講じることで、主体的・対話的に学ぶ生徒を育成することができるであろう。

(1) 基礎・基本の定着

学び合い、深め合う学習活動の基盤となる基礎・基本の定着を図る。

(2) 学び合う場の設定

学びを深められるように、小グループでの学習活動を積極的に取り入れた授業を行う。

(3) ジャンプ課題の設定

生徒が解いてみたくなるような課題を設定し、意欲を高める。

4 研究計画

4. 1 研究対象

塩竈市立玉川中学校 1学年107名

4. 2 研究の計画

研究主題の設定：4月

実態把握：5月

研究実践：5月～1月

研究のまとめ：1月

5 研究の概要

5. 1 授業の手立てについて

(1) 基礎・基本の定着

社会科における基礎・基本として、社会的な見方・考え方を働かせるために必要な「知識」、様々な資料を効果的に活用する「技能」、「社会的事象を多面的・多角的に考察し適切に表現する力」の習得を目指す。

これらの基礎・基本が身に付いていて「学び合い、深め合う学習」が成立すると考える。そのため、基礎・基本となることを共有課題として、定着を図りたいと考える。

(2) 学び合う場の設定

私のこれまでの授業を振り返ると、教師主導の「教え込む授業」であったように思う。生徒自身の「気づき」や「考え」を

育むため、「学びの共同体」で提唱されている「コの字型の机配置」「男女4人グループ」の学習形態を活用していく。

(3) ジャンプ課題の設定

生徒を主体的に学びに向かわせるために、基礎・基本の発展としてジャンプ課題を設定する。「分からなさを共有できる課題」として、教科書からは読み取ることが難しい社会的事象について、複数の資料から考察するような課題を提示することで、さらに学習への意欲を高められると考える。

5. 2 授業実践

(1) 基礎・基本の定着

① 知識の習得

知識を正しく理解・習得させるために、常に複数の手法を用いることに努めた。

地理的分野の「赤道」を例に挙げると、「地図帳で赤道の場所を確認して色ペンでなぞる」、「小グループやペアで『赤道とは何か』を説明しあう」等、オーソドックスな複数の手法を用いて知識の習得を目指した。授業でこの方法を繰り返すうちに、教師からの「○○って何かな」などの問いに対し、自信を持って答えられる生徒が増えてきた。

② 技能の習得

地理的分野を例にする。アジアの年降水量を示した地図から地域ごとの降水量の差を読み取り、さらに地域ごとの雨温図で気温や降水量の特色を確認する。これをアジア州、ヨーロッパ州…と繰り返した。

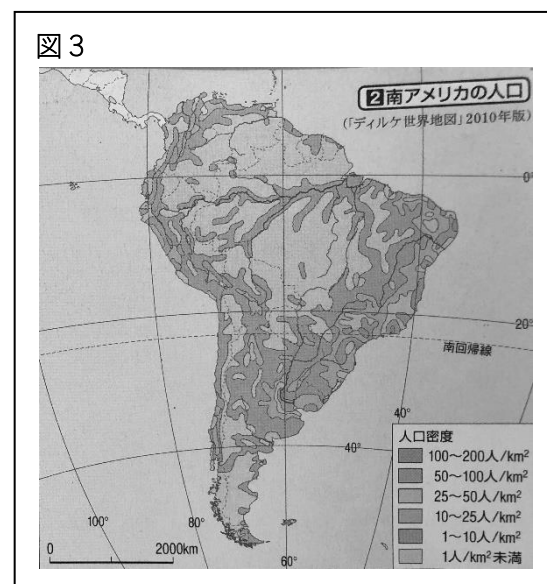
このように資料を読み解く練習を重ねていくうちに、資料の見方・読み方に慣れ、課題に答えられる生徒が増えてきた。

③ 社会的事象を多面的・多角的に考察し適切に表現する力の習得

南アメリカ州の学習では、南アメリカ州の降水量を表した地図〔図2〕と、南アメリカ州の人口分布を表した〔図3〕、さらに地図帳の南アメリカ州のページを示した。これらの資料から、南アメリカ州の年降水量と人口分布にはどのような関係があるのかを考察させた。

多くの生徒が「降水量の多い地域や川沿い、平原は人口密度が高い」ということに気付くことができた。また、「なぜそのような場所に人が集まるのか」という問いに対し、「降水量が多いと農作物を栽培できるから」や、「平地の方が暮らしやすいから」のように、これまでの学習内容を踏まえて考察を深め、自分の言葉で説明できる生徒もいた。

続くオセアニア州の学習では、降水量・人口・家畜の分布を表した資料を使って、それらの関係について考察させたところ、南アメリカ州の学習を踏まえながら考察できた生徒が多く見られた。



(2) 学び合う場の設定

上記(1)基礎・基本の定着の②, ③を実施するとき、「コの字型の机配置」「男女4人グループ」の学習形態は有効に働いているように感じた。小学生だった2年前からこの形態に慣れ親しんできた生徒がほとんどだったため、しぜんと分からないことを教え合う姿や、資料から考察する場面で積極的に意見を交わすことができた。

他者の意見を取り入れ、自分の意見を発信する経験を重ねることは、自分の考

えを広げたり、深めたりすることにつながると考える。その意味で、この学習形態は効果的であった。

(3) ジャンプ課題の設定

地理的分野における乾燥帯の授業では、『なぜ人々は乾燥した土地に暮らし続けるのか』という問いをジャンプ課題に設定した。これを授業冒頭に提示し、この課題を解決するために必要な基礎事項を共通課題として学んでいく構成にした。

これにより、ジャンプ課題を解くための方法を主体的に考えながら共通課題に取り組む姿が見られた。

ジャンプ課題として新たに提示した資料は、乾燥帯に属する国々の原油生産量、エネルギー資源の移動を矢印で示した資料、砂漠で行われるセンターピボットの写真等である。共通課題で学んだ乾燥帯の自然環境等を踏まえ、新たな資料から「豊富に産出する原油を輸出することで大きな利益を得ている」「得られた利益を使って大規模な灌漑を行い、降水量が少なくても農業が可能になった」などのことを読み取らせかけた。

比較的学力の高い生徒でも戸惑う様子が見られ。また、小グループで活発に意見を出し合い、答えにたどり着こうと必死に考察を巡らせる姿も見られた。



写真1. グループでの学び合いの様子

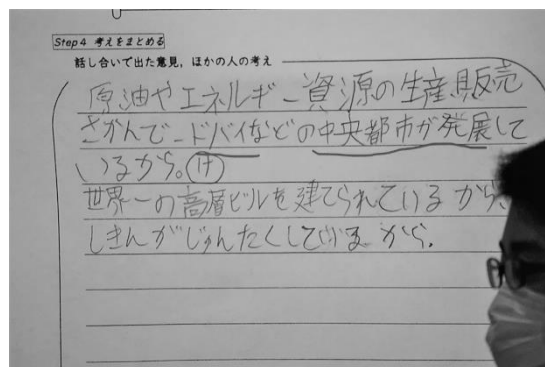


写真2. ジャンプ課題の答えを画面に映して共有

6 研究の成果と今後の課題

6.1 アンケート結果

2学期に行ったアンケート(図4)では、「社会科の学習が好きか」という設問に対し、「好き」「やや好き」と答えた生徒が63%となり、4月当初と比べて約10%上昇した。

このように回答した理由として、「もっと色々なことを知りたい」「楽しみながら学ぶことができた」「調べていくと面白いから」等の記述が見られ、授業を通して社会的事象に興味を持ち、学びへの意欲を高めることができた生徒が多くいることが分かった。

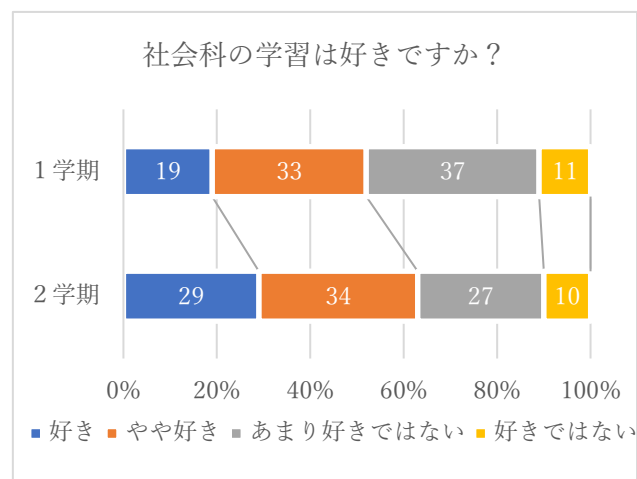


図4. アンケート結果の比較

6. 2 研究の成果

(1) 基礎・基本の定着

基礎・基本に関する学習を疎かにせず、スモールステップで取り組んだことで、「学び合い、深め合う学習」の基盤ができてきたと考える。

(2) 学び合う場の設定

用語の確認、資料からの考察をするときにペアや小グループで学習を進めたが、生徒同士が自然に対話する様子が多く見られた。これは本校のみならず、塩竈市全体で協同的な学びを進めてきた成果だと思われる。

(3) ジャンプ課題の設定

単元によっては、ジャンプ課題を先に提示してから共有課題に取り組む授業構成にすることで、生徒を主体的に学びに向かわせる効果があることが分かった。

6. 3 今後の課題

(1) 基礎・基本の定着

教師主導で教授してしまう場面が多かった。生徒が自然と学びに向かえるような最小限の声掛けや資料の精選ができるよう、工夫を続けたい。

(2) 学び合う場の設定

コの字やペア、小グループなど、それぞれの形態が、どのような学習活動で効果を発揮するのかを見極めながら活用することが必要である。質の高い授業を実践していくためにも工夫して指導をしたい。

(3) ジャンプ課題の設定

共有課題とジャンプ課題を基にした授業構成を考えることが難しいと感じた。

学び合いを成立させる重要なポイントとなるので、生徒に「解いてみたい」と思わせるようなジャンプ課題を提示できるように、実践を重ねていきたい。

7 まとめ

「学びの共同体」の理念に基づいた授業を実践するに当たり、これまで実践してきた社会科の授業を大きく改善させる必要があった。培ってきたものを一度手放し、「学び合い」「ジャンプ課題」「分からなさをつなぐ」等、新たな要素や視点を交えて授業を再構築することはとても勇気のいることだった。

しかし、新たな授業スタイルを模索する中で、これまで思い付かなかった展開の仕方や、それに伴った指導スキルの必要性があることに気付くことができた。それらを身に付け、教師として多くの引き出しを持ち、よりよい学習指導ができるよう今後も研鑽に励みたい。